

## 英文の読み方を考えるⅦ

### —否定比較表現について—①

平井 正朗

Xの程度についてAとBの「大小」関係を記号化すると①  $A > B \Rightarrow A \text{ is more } X \text{ than } B$ , ②  $A < B \Rightarrow A \text{ is less } X \text{ than } B$ , ③  $A = B \Rightarrow A \text{ is as } X \text{ as } B$ に範疇化される。①～③に共通するのは、主体Aに対して客体となりうるBを引き合いに出し、Xについての「程度」を比較しているだけであり、必ずしも  $A \text{ is } X$  ということではない。たとえば、 $\text{He is as old as I.} \rightarrow$ 「彼は私と同年である」の場合、年齢の上下を相対的次元で比較しているのであり、contextによって必ずしも「年取っている」と日本語化できるとは限らない。ただし、oldに強勢が置かれると  $\text{I am old}$  が含意される。なお、絶対的次元での比喩(直喩)表現とも言える  $\text{as busy as a bee}$  などは「比較」と言うよりはむしろ「強調」に重点を置いた言説と考えるようにしたい。以上の基本概念を踏まえて、本稿では、誤訳が散見される否定比較表現について考察する。

- (01) You gave the Red Cross the donation because you wanted to lend a helping hand; you wanted to do a beautiful, unselfish, divine act. If you hadn't wanted that feeling *more than* you wanted your money, you would not have made the contribution. (東京理科大, 03)  
(あなたは救いの手を差し伸べることを望んで赤十字に寄付した。つまり、美しく、欲のない、神のような行為を望んだのである。もし、その感情よりお金だけを望んでいたら、そのような寄付はしなかっただろうに)

$A \text{ is NOT more } X \text{ than } B$  は、 $A > B$  である  $A \text{ is more } X \text{ than } B$  の否定命題であるから  $A \leq B$  の関係になる。従って、「XについてAはBと同レベル、もしくはそれ以上でない」という原義が生

成され、「AはBよりXでない、AはBほどXでない」と訳すことができる。「AはBほどXでない」は  $A \text{ is not as } X \text{ as } B$  ( $A < B$ ) と日本語が同じになるが、優等比較と同等比較の差異から生じる潜在意識が異なるため同義ではない。(01)では、 $\text{that feeling} \leq \text{your money}$  の関係が成立している。従って、直訳は「お金以上にその感情を望んでいなかったら」であるが、命題を反転させて「その感情よりお金だけを望んでいたら」と意識することができる。また、仮定法過去完了で描写されており、 $\text{that feeling}$  が承前語句になっていることから「美しく、欲のない、神のような行為をすることだけを望んでいたからこそ寄付した」という深層談話情報を読み取りたい。否定比較構造を含む仮定法の文解析エラーには注意を要する。

- (02) "SARS is an indication of what we can expect in the future," says Stephen Morse, an expert on emerging infectious diseases who teaches at Columbia University. "The conditions that allow bacteria and viruses to reach large populations and spread globally have increased in recent years and will continue to grow."

It's *not* as if viruses had suddenly become *more* muscular in the past few years. (奈良女子大, 05)

(「SARSは、われわれが将来、予期できるものの兆候なのです」とコロンビア大学で教鞭をとる新型感染症の専門家スティーブン・モースは語る。さらに「バクテリアやウイルスが大人口地域まで達して、世界中に蔓延するのを許す条件は近年増加しており、これからも増大していきます」とも付け加える。

ウイルスが過去数年間で突然より強力になったというわけではない)

(02)は, Viruses didn't suddenly become more muscular in ... の否定辞 not を左方移動し, 後方照応語句となる it を形式主語として生成, <情報予告>の機能を担わせ, さらに<情報展開>である as if 節を仮定法過去完了にすることによって談話に<比喩>情報を付加している. 構造的には主節 It's not が直説法であるから「事実」, as if 節は仮定法であるから「非現実」を描写しており, 全体で仮想命題を否定したものになっている. 読解過程では, 仮定法内部の任意削除部分を as (it would have been) if viruses had suddenly become more muscular ~ に復元した上で, ステューブン・モースの主張に対して筆者の見解として「ウイルスが過去数年間で突然当時より強力になることがあったと仮定してその可能性を想定することもできるものの, 実際そうではない」という深層談話情報を読み取らなければならない.

(03) Many of life's well-known stress producers — divorce, loss of employment, moving, even fighting traffic — still hold out hope of a better outcome in the future. After all, one may end up with a better spouse, exciting new job, beautiful home, or fresh bottle from the drive-through liquor store.

Death, by contrast, involves as much trouble as any conventional stress, if *not more*. (上智大, 05)

(人生でよく知られたストレスの原因となるものの多くは, 一離婚, 失業, 引っ越し, 交通渋滞でさえ—まだ将来, もっとよくなるだろうという希望がある. つまり, よりよい配偶者, わくわくさせるような新しい仕事, 美しい家, あるいはドライブ・スルーの酒屋から買った新鮮な酒に出会えるかもしれない.

死は, それとは対照的に, より大きなとは言わないまでも, あらゆる月並みのストレスと同じくらいの問題を抱えている)

(03)では if 節内部に反復共通語句が任意削除さ

れたものになっているので, if death doesn't involve more trouble than conventional stress に復元し, trouble の程度について death  $\leq$  conventional stress の関係を把握し, 「死が月並みのストレス以上の大きな問題を抱えているとは言わないが, それと同等の問題は抱えている」という深層談話情報を読み取りたい.

(04) Mozart was, we know, greatly appreciated in his lifetime, but only in Europe. He would *not* be *as* widely known *as* he is today throughout the world without the invention of recording equipment, film music, and plays and films about his life. (東京大, 04)

(モーツァルトは, 彼の生涯でたいへん称賛されたものの, それはヨーロッパだけであったということのをわれわれは知っている. 録音装置, 映画音楽, 彼の生涯についての劇や映画が発明されていなければ, 彼は今日ほど世界中に広くは知られていないだろう)

A is NOT as X as B は, A = B である A is as X as B の否定命題であるから A > B ( $\rightarrow$  A is more X than B) と A < B ( $\rightarrow$  A is less X than B) の関係が成立するが, 通常の談話では後者が多い. たとえば, He is not as tall as I. の場合, tall について He < I の解釈が自然であるが, He is not as tall as I, but he looks a bit taller. というように談話情報が付加されると He > I になる. (04)は仮定法過去を用いることによって読者の視点を非現実的空間に移動させているので全体としては仮想命題ということになる. <テキスト内情報>では「モーツァルトの知名度」に焦点を当て, 仮定法による「非現実世界」( $\rightarrow$  He would not be widely known)と直説法による「現実世界」( $\rightarrow$  he is [widely known] today)の対比がなされているので, 「録音装置, 映画音楽, 彼の生涯についての劇や映画が発明されているからこそ, 今日, 世界中に広く知られている」という深層談話情報を読み取らなければならない.

(05) For the artist of her own life, it is *not*

*so much* a question of what she has been given *but* of what she can make of what she has been given (no one chooses their parents, but everyone invents them, makes what they can of them.) (首都大学東京, 10)

(芸術家としての彼女自身の人生を通じて、それは与えられたものが何であるかという問題ではなく、むしろ与えられたものから何を作り出すかという問題である。誰一人として両親を選び出すことはないが、誰もが皆、両親を作り出し、また、両親から何かを作り出すのである)

A is not so X as B 「AはBほどXでない」(A < B)は主語となるAに対し、その比較対象となるBを引き合いに出してXについての程度が劣ることを言説化する構文であるが、共通の主語Sに対し、その性質や状態となるAとBを対比する場合はS is not so much A as B(≡ S is less A than B, S is more B than A, S is rather B than A)となる。これはas much A as Bの否定形であり、意味上not A but rather Bに近い。not so much A as Bは「AというよりはむしろB」と慣用語法化されているが、A < Bという原義は変わらず、構造の違いが訳の違いに反映されているにすぎ

ない。(05)ではthe artist of her own lifeについて、a question of what she has been given < (a question) of what she can make of what she has been givenの関係になっている。また、asがbutに代用されているが、contextに応じて学校文法を超えた読み方を喚起したい。

(06) Are all arranged marriages successful? **No more than** all romantic marriages are. But, ultimately, what makes a marriage work is not how it began but what you do with it.

(名古屋大, 02)

(すべての見合い結婚が成功するのか? すべての恋愛結婚が成功するとは限らないのと同じように、すべての見合い結婚が成功するとは限らない。しかし、結局、結婚がうまくいくかどうかは、どのようにそれが始まったかではなく、それをどう扱うかで決まるものだ)

(06)の場合、後続する文No more than ~は前文の共通反復語句を任意削除した“クジラ文”(CHART NETWORK No.55参照)である。読解過程では次のように復元して読めるようにしたい。

All arranged marriages are

successful.

↓任意削除

↓任意削除

φ

no more

φ

than all romantic marriages are.

⇒【テキスト内情報】: 「すべての見合い結婚が成功するとは限らない」

⇒【テキスト外情報】: 「すべての恋愛結婚が成功するとは限らない」